

# 苦悩の日々

炎華

いつものように、カーテンの隙間から漏れ出る光で目が覚めた。  
いくら遮光の強いカーテンをかけていても、  
雨戸のない窓からは、  
眩しい光がカーテンのあらゆる隙間から漏れてくる。

「やっぱり、雨戸がないとだめだな。」  
そう呟いてから、思い切って上半身を起こす。

夫は夜から、私は夕方から仕事に出るので、  
昼間は寝ていることになる。  
早朝、夫が帰ってきてから2人で過ごし、  
7時頃に寝て、私は午後1時半に起きる。

夫を起こさないように、台所に行き、歯を磨き、顔を洗う。  
ユニットバスに洗面台がないので、  
1DKのアパートでは、化粧をしたり、支度をするのは、  
夫の寝ているそばですることになる。  
しかし、電気をつけても、夫は滅多に目を覚ましたことがない。  
カーテンを開けることはない。  
目の前のアパートの廊下から、部屋の中が丸見えになるからだ。  
例え、カーテンを開けたとしても、  
南側に建っているこの3階建てのアパートで遮られて、  
2階のこの部屋に日光なんて入ってこない。  
「ここを借りたときは、あのアパートはなかったんだよ。  
すぐにあれができてき。」  
ここに私が来るようになったとき、夫は言った。

その頃、私はここに逃げて来ていたのだ。  
だから、日が当たろうが、当たらなかろうが、  
そんなことはどうでも良かった。  
夫がいてくれれば、それで良かったのだ。

コーヒーを淹れるためのお湯が沸いた。

ここにはポットがない。

必要なときに、必要なだけ沸かす。

1人分のインスタントコーヒーをいれて、

テーブルの上に置く。

テーブルは、冬にはコタツになる。

支度を終え、3時に家を出るときに、夫を起こし、

「いってきます。」

を言う。

その後私は30分間電車に乗って、職場に向かう。

夫は私を玄関まで見送った後、自分の起きる時間まで再び寝る。

それが日常だった。

夫は、1年ほど前から、コンビニの店長を任されていた。

オーナーが他の仕事で店舗の管理ができなくなり、

夫に店長を譲った形になった。

夫の仕事は格段に増えた。

店に入る時間も大体は決まっていたが、

急に変わったりすることも多々あるようになった。

早朝帰って来て、少し仮眠して、

また10時頃出て行くこともあった。

私は夫の体が心配だったが、

夫の方は、

店をどうやって切り盛りするか、儲からせるかを考えるのが楽しいし、

それで頭がいっぱいだと言う。

そう言われては、こちらは何も言うことはできなかった。

店長の仕事の中で、夫が一番気を配っていたのが、

お店で働くアルバイトさんの事だった。

色々な方が働いている。

お孫さんに何か買ってあげるお小遣いを稼ぎたいお祖母ちゃん、  
小学生の息子さんが学校へ行ってる間だけ働きたいヤンキーママさん、  
いつでもo.k.の頼もしいフリーターさんなどが、  
入れ替わり立ち替わり、シフトに沿って働いていた。  
人手はいくらあっても足りない。  
それを補ってくれるのが学生さんだ。  
夫の店も、学生のバイトさんが一番多かった。  
この学生さんをどう扱っていくかが、かなり大きな課題らしかった。  
学生さんは、講義がある、授業がある、テストがある、  
一人暮らしをしていれば、実家へ帰る。  
アルバイト以外にも色々な行事を抱えており、  
優先順位ではアルバイトは二の次三の次になってしまうので、  
扱いが難しいと言う。  
夫が言うには、  
店長として、きちっとやっている姿を見せつつ、  
慕われ、好かれるのが一番いい、ことだと。  
それには、相談にのったり、話を聞いてあげることも必要だという。  
特に女の子には。

その日は珍しく、夫が私と一緒に起きた。

「珍しいね。」

と言うと、

「たまにはね。」

と言う。

久しぶりに、2人分のコーヒーのお湯を沸かし、  
いつものように3時に家を出た。

仕事を終え、家に帰ってくると、部屋がやたら綺麗になっている。

きちんと畳まれた布団。

塵ひとつなく、余分な物が全て片付けられたカーペットの上。

いつもは上に色々乗っているのだが、

そのときは何も置かれていないテーブルが唯一つ置いてあった。  
台所も、ぴかぴかになっていた。  
しまえる物は、全てしまっていた。  
ただ、シンクにはお客様用のコーヒーカップとソーサー、  
ケーキを食べたらしいお皿と  
フォークが3セット洗わずに置いてあった。

—誰か来た。それも、特別な。

この部屋は来客が多いので、人が来るのは珍しいことではないが、  
何か雰囲気が違う。  
いつも来る友人達やアルバイトの子達ではない。  
そうだったら、こんなに部屋に違和感があるはずがない。  
違う。全てが違う。  
まるで違う部屋に来たかの様だ。  
中の空気まで違う様だった。

夫は、このために早く起きたのだ。  
部屋を掃除して、シンクの中の食器を洗って、  
お茶の用意をするために。  
来客があるとは一言も言わなかった。  
なにが、『たまには』だ。  
疚しいことがなければ、はっきり言えばよかったじゃないか。  
もやもやした気持ちを抑えつつ、カップを洗う。

仕事から帰ってきた夫に尋ねると、  
アルバイトの女の子が2人、ケーキを持って遊びに来たという。  
夫が名前を言うと、彼女らの顔が浮かぶ。  
「ああ、あの子達か。」  
初めてこの部屋に来る女の子達。  
それなら、部屋を綺麗にしておこうと思うのもわかる。  
それでも、こんなに完璧にしておく意味があるのか。

「悩み事が沢山あるって言っててさ。  
そのせいで辞められても困るから。」  
片方の子が色々悩んでいたの、話を聞いてあげたそうさ。  
『話を聞いてあげるのも仕事』と聞いていたので、  
なんとなく納得したような気になって  
そのときは終わった。  
悩みなら、私がいなくてよかったわけがわかる。  
だが、心のどこかで、もやもやが残った。  
やっぱり、おかしいよ。何か変だ。

そして、そのもやもやは、それからもずっと続くこととなる。  
彼女らはその後も頻りに部屋にやってきていたのだ。  
それも、私が仕事に出てからやってきて、帰る前に帰って行く。  
事前に何の報告も無い。  
それが続くと、さすがにいい気分ではなくなってくる。  
確かに、私は夫の店とは無関係だ。  
顔を合わせる必要もないだろう。  
ただ、  
今までのバイトさんは全て、うちに来るときは、  
男女共に私のいるときに来て、  
一緒に飲んだり食べたり騒いだりしていた。  
それが、なぜ今回に限って、夫は私のいるときに招待しないのか。  
疑問は膨らむ。  
そして、疑惑にかわる。  
本当に『2人』で来ているのか。

後々になって、  
『彼女らもしくは彼女が、『私がいなくて』に訪問した。』  
ということが、夫にとってかなり不利になったことを、  
ここに記して、このお話の最初のページを終わらせたいと思う。

## それが本音か

---

この部屋が住処になったとき、私の精神状態は普通ではなかった。  
責められ続ける夢をみて、泣きながら叫んで目を覚ましたり、  
一日中ぼんやりしていて、  
今仕事に行ったはずの夫が目の前に立っていたりした。  
そんなことはしょっちゅうだった。

しかし、その頃のことは霧がかかったようにもやっとしていて、  
今でもはっきり思い出せない。  
ずっと自分を責めていたような気もする。  
ずっと何も考えないようにしていたのかもしれない。

責められて、傷ついて、味方もなく、やっと逃げ出してきた。  
長年住んだ所から、ほとんど何も持たずに。  
夫は、そんな私をずっと護ってくれていた。  
少しでも何か食べられるように。  
少しでも眠れるように。  
気が紛れるだろうと、休みの日には外へ連れ出してくれた。  
夫の運転する車の助手席で、私はずっと外の景色を見ていた。  
車の流れる通りから、山道に入り、緑が流れていくのをただ見ていた。  
時々、何かに追われているような気がして、  
胸が痛くなることもあったが。

ふと、ひとりではないことに気がついて、夫を見る。  
前を見て運転している横顔がすぐに笑顔にかわった。  
それを見ると、いつもとても安心できた。  
「やっそこっちを見てくれた。」  
笑顔の横顔が言う。

・ ・ 心配、かけてるんだ。

また、つらいときのことを考えているんじゃないか、

それでも、逃げて来た場所へ、私が戻ってしまうんじゃないかと、そんなことも考えているのかもしれない。

「ごめんね・・・」

「なんであやまる？」

語尾を強くして夫が訊ねる。

「・・・いつまでも、こんな、だから。」

言葉に詰まりながら私が答えると、

「そんなの、気にすることないよ。

あやまることじゃない。」

車が停まると、

目の前にきらきら光る湖と雲が少しかかった富士山があった。

「あのままだったら捨ててた。」

私はあの『普通ではない』状態から脱していた。

当時、友人からは心療内科へかかって薬をもらった方がいい、と言われていた。

その方が楽になる、と。

そうできたら、どんなに良かったらう。

私は自分がどんなに弱い心を持っているかわかっている。

一度薬を服用してしまったら、

その楽さを経験してしまったら、

もう二度と薬を手放すことができなくなる。

苦しくても、辛くても、

私のために広げられた腕だけを頼りにして耐えていた。

そして、それが何よりもの薬だった。

—あのままだったら捨ててた—

今、今なんて？

いとも簡単に発せられた言葉の意味をすぐには理解できなかった。

私が、あのまま治らなかったら、見放した、と？

体が微かに震えてくる。

あんなに一生懸命私を支えてくれていた夫の口から、  
そんな言葉がでてくるなんて思いもしてなかった。

何も言うことができず、夫を見上げる。

私の尋常ではない様子に、

今の言葉が不用意だったとなんとなく悟った夫は慌てて付け足した。

「あのままだったらだよ。あのままだったら、ね。」

聞いてしまった言葉は、もうなかったことにはできない。

夫に対する視点が変わった瞬間だった。

もう、夫の傍に安らぎはない。

無邪気に甘えたり、我が儘を言ったりできない。

いつも警戒し、不信感を抱えるようになった瞬間だった。

役に立たなくなれば捨てられる。

面倒くさくなれば放置される。

他に好きな人ができれば邪魔になる。

他に好きな人ができれば、もういらなくなるんだ・・・

## 居場所

---

今日は風が強い。

すごく天気良くて、風が窓をがたがた揺らすときは、  
ここに来たばかりの事を思い出す。

子供の頃からずっと暮らしていた町を離れてきた。

一方通行の多い狭い路地。

所狭しと建った家々、マンション。

遠くには、ビルが林立する繁華街の遠景が見えた。

ここは、何もない。

カーテンの隙間から外を見ても、

見えるのは3階建てのアパートの廊下だけ。

日光が入ってくるのは、午後の一瞬だけだ。

それでも、夫がいてくれればそれでよかった。

でも。

本当にここが私の居場所なんだろうか。

育った町には、いつの間にか私の居場所はなくなってしまっていた。

最初からなかったのかもしれない。

ずっとそれに気がつかなかっただけなのかもしれない。

「そこにいるのが辛いなら、こっちへおいで。」

夫はそう言った。

言ったけれども。

本当にここにいてもいいのだろうか。

勝手にここが居場所だと思い込んだだけなのかもしれない。

・・・また、すぐ無くなってしまいかもしれない。

天気が良くて風の強い日、

風が窓を揺らした日、

ふらっと外に出た。

ここに来てからその日まで、一人で外に出たことはなかった。

「一人で外に出てもいいからね。

でも、携帯だけはちゃんと持って行って。」

夫が言ったことを、忠実に守って携帯と鍵だけを持って部屋を出た。

途中、夫の働くお店に寄った。

中には入らず、ウィンドウから中を覗き、

夫の姿を確認してから歩き始めた。

どこへ行くかは考えていなかった。

ここは山を切り開いて造った町だった。

線路が一番低くなっていて、南側はずっと高台になっている。

今は道の脇に家が建ち並んでいるが、

それでも山は山で、勾配はかなり急になっている。

— そうだ ここを登ろう。

頂上まで行くのに、どれくらいかかるだろう？

1時間位だろうか。

車ではすぐでも、歩いて行くとそれくらいはかかるだろう。

— 行こう。上から町を見たい。

歩き始めた。

かなりきつい坂がずっと続いている。

車が横をひっきりなしに通る。

足がだんだん疲れてくるが、ムキになって登る。

頂上に行くと、駅前の繁華街がよく見えるのだ。

— 見たいんだ。上から。

20分位登り続けて、やっと少し平らな所まで来たとき、  
後ろを振り返った。

—こんなもんだっけ？

思ったより、眺めは良くなかった。

道は真っ直ぐだと思っていたが、少しカーブしていて、  
歩道からだど、建ち並ぶ家々が邪魔をしてほとんど何も見えなかった。

—もっと高い所へ行こう。

国道に出て歩いた。

どんどん家から離れていった。

「こうやって、猫は迷子になるのかな。」

昔、家で飼っていた猫を思い出していた。

茶トラの雑種の雄猫だった。

迷い込んできた猫が産んだ子猫の中の1匹だった。

とても甘えん坊だった。

ぼんやり立っていると、体を駆け上がってきて、

肩に両手をがしっと食い込ませる。

駆け上がられた方はびっくりして、

かの子が落ちないように、慌ててお尻を支えて抱っこするのだが、

この子がまた重いのだ。

だが、

耳元で「にゃー」と甘えた声で鳴きながら頭を肩に乗せてこられると、

下におろすわけにはいかなくなる。

手のしびれと闘いながら、その至福を味わう。

その『甘えん坊』は、突然いなくなった。

しばらく待っていたが、とうとう帰ってこなかった。

飼っていた猫がいなくなるのは、珍しいことではなかった。

私が可愛がっていた真っ黒な子猫も、

子供の声がしてたと思ったら、

もういなくなってしまうていた。

面倒をみていた母は、いっさい騒ぐことはなかった。

何を思っていたのかは最後までわからなかった。

猫は遠くへ行つて、

そのテリトリーを守る他の猫に追いかけて追いかけて、

気がついたときには、家から離れてしまい、

帰れなくなるのだと聞いたことがある。

—あの子もそうだったのかな。

ふと、それまで考えてもいなかったことが、突然浮かんで、足が止まる。

車の走っていく音だけが妙に耳につく。

—まさか、本当は死・・・

猫は死ぬときにいなくなるという。

本当は死んでしまっていて、私には言わなかつただけだったのか。

一番可愛がっていた母は、少しも騒がなかった。

あれは、そういうことだったのだろうか。

今ではもう追求もできない。

願わくば、そうでないことを。

国道に入ってから、人に会うことはほとんどなかった。

車ばかりが通り過ぎていった。

それでもムキになって歩いていた。

何をそんなにムキになっているのか、自分でもわからなかった。

日も暮れて、どんどん暗くなっていった。

それでも歩いた。

上に向かって。

家から離れて。

どこまで行けばいいんだろう。

どこまで行けば、気が済むんだろう。

何故私は歩いているんだろう。

何を探して歩いているんだろう。

そのとき、ポケットの携帯が振動した。

夫からだった。

『今、どこかな？もうだいぶ暗くなってきたよ。』

画面には、その文字があった。

—何も言ってこなかったのに。なんで？

出掛けるとき、夫のお店を覗いた。

—そうか。あのときに。

今までの重たい気持ちが、ずっと軽くなった気がした。

—いいんだ、あそこにいても。

あそこが私の居場所なんだ—

改めて、そう思えた。

「自分の居場所を確認しに行ったんだよ。」

友人が言った。

きっと、そうなんだ。

その通りなんだ。

あの子ども、自分の場所をみつけることができただろうか。

今、私はまた居場所を失っていた。

あんなに確かに『ここにいてもいいんだ』と思えた場所は、

もう、どこにもなかった。

